

『純粹理性批判』におけるア・プリオリの意味

The meaning of “a priori” in “The Critique of Pure Reason”

甲 田 純 生

KODA Sumio

広島国際大学 心理学部紀要 第6巻 抜刷

The Bulletin of Faculty of Psychology, Hiroshima International University Volume 6
2018

広島国際大学

Hiroshima International University

『純粋理性批判』におけるア・プリオリの意味

広島国際大学心理科学部臨床心理学科 甲田純生

一 はじめに

カントは『純粋理性批判』(以下「第一批判」と表記する)第二版の序論で次のように述べている。

純粋理性本来の課題は…つぎの問いのうちに含まれている。ア・プリオリな総合的判断はどのようにして可能か? (B19⁽¹⁾)。

ここにははっきりと、「ア・プリオリな総合判断はいかにして可能か」ということが第一批判の根本的問いであることが謳われている。したがって、「ア・プリオリ」は第一批判における最重要概念の一つである。このことに異存のあるカント研究者はいないであろう。

では「ア・プリオリ」とは何を意味するのだろうか。このことはカント研究においては自明のことであるように見える。「ア・プリオリ」の意味を聞かれて答えられないカント研究者はいない。だが、自明であることに胡坐をかいては哲学ではないし、ましてや「ア・プリオリ」の意味は、もはや改めて問い尋ねる必要がないほどにクリアなわけでもない。

我々はまず、カント事典⁽²⁾に依拠しながら、これまで人口に膾炙してきた「ア・プリオリ」の意味を確認しておこう。

二 「ア・プリオリ」の意味

「ア・プリオリ」は「先に」を意味するラテン語であり、それゆえ日本語では「先天的」と訳されることも多かった。

「先天的」という日本語は、一般的には「生まれつき」を意味する。だが、第一批判においては「ア・プリオリ」という語はこのような意味合いを微塵ももたない⁽³⁾。では第一批判において「ア・プリオリ」が意味する「先に」は、何の「先」なのであろうか。カントは次のように述べている。

私たちの認識がすべて経験とともに開始されるからといって、認識はそれゆえにことごとく経験から生じるというわけではない(B1)。

我々の認識はすべて、経験と「ともに」始まる。経験がなければ認識は生じえない。だが、だからといって、認識を構成するものもすべて経験に由来する、というわけではない。認識には、経験に由来しない契機が存在する。この洞察こそ、「コペルニクス的転回」と呼ばれる、カントの根本洞

察であった。

この「経験に由来しない」、すなわち「経験に先立つ」ということこそ、「ア・プリオリ」の根本的な意味に他ならない。

経験に依存せず、感官の印象のいっさいにすら依存しないような認識があるかどうか。この問いは、すくなくともさらに詳細な探求を必要とする問いであって、一見してただちに解決されるような問いではない。そうした認識はア・プリオリなものと呼ばれ、経験的な認識から区別される(B2)。

カントはさらに次のように言う。

必然性と厳密な普遍性とは…ア・プリオリな認識の確実な標識であって、たがいにまたわかちがたくむすびあっている(B4)。

ア・プリオリな認識は必然的かつ普遍的な認識である。ゆえに、必然性と普遍性が「ア・プリオリ」のメルクマールである。

以上をまとめると次のようになる。「ア・プリオリ」とは「経験に先立つ」「経験に依存しない」という意味であり、必然性と普遍性をそのメルクマールとする。

三 経験とは

では、以上により『純粹理性批判』におけるア・プリオリの意味」という、本論文の表題が掲げている課題は解決したのであろうか。

そうではない。我々はカント研究における周知の事実を確認したにすぎない。そもそも「経験に先立つ」ということが一体何を意味しているのか、全く明らかではない。これを解明するためには、「経験に先立つ」と言うときの「経験」が何を意味しているのかを明確にする必要がある。「経験」の意味を厳密に規定し得なければ、「経験に先立つ」を意味する「ア・プリオリ」の意味もやはり厳密に規定しえないからである。

第一批判で用いられる用語は、一見ふつうの言葉に見えても、特別な意味で用いられていることが多い。「経験」という語もそうである。

カント事典には「経験」について次のような記述がある。

「経験」とは「一種の認識様式 (eine Erfahrungsart)」である [BXVII]。もっと端的に言えば、「経験的認識 (eine empirische Erkenntnis)、つまり知覚によって客観を規定する認識」

のことである [B218] ⁽⁴⁾。

日本語の一般的な用語法では、「経験」は個人的なものであり、ゆえにどちらかと言えば主観的である。しかしカントの用語法においては、この語は「客観を規定する認識」を意味するのであるから、むしろ客観的である。

ここで我々は、カントが第一批判によって自然科学の基礎づけを目論んでいたという、哲学史における周知の事実を思い起こす必要がある。カントは次のように言っている。

右に挙げた課題を解決することは同時にまた、対象のア・プリオリな理論的認識をふくむいっさいの学を基礎づけ遂行する際の、純粋な理性使用の可能性 [への問いに答えること] を、すなわちつぎの問いに答えることを包括している。

純粋数学はどのようにして可能か？

純粋自然科学はどのようにして可能か？ (B20)

第一批判における「経験」とは、自然科学を成立せしめるような経験のことなのである。ここに至って我々は、「ア・プリオリ」の意味をより厳密に規定するための出発点によりやく辿り着いたことになる。「自然科学を成立せしめるような経験」という言葉でもって、我々は一体何を具体的にイメージすればよいのであろうか。

四 ア・プリオリな総合判断

ここで、「経験」の意味内実を確定する前に、少し回り道をして、ア・プリオリな総合判断の具体例を第一批判に即して見ておこう。本論文で「ア・プリオリ」の意味が確定したときに、これらの具体例とつきあわせることで、確定された「ア・プリオリ」の意味と具体例との間に不適合がないか検証することができるし、また、ア・プリオリな総合判断の具体例そのものが、「経験」とは何か、「ア・プリオリ」とは何か、を考える手がかりを与えてくれるからである。

カントは次のように述べている。

…本来の数学的命題は常にア・プリオリな判断であって、経験的なものではない…。数学的命題は必然性をともなうからであり、必然性を経験から引き出すことはできない(B15)。

カントは幾何学の例を挙げている。

純粋幾何学の原則もまた、いずれも分析的なものではない。「直線は二点間の最短の線である」は、一箇の総合命題である。直という私の概念は、大きさについてはなにもふくんでいない。質をふくむだけである。最短という概念は、したがってまったく付けくわってきたものであ

って、直線概念をどのように分解しても引きだせないものである(B16)。

さらにカントはこう言っている。

自然科学(自然学)は、ア・プリアリな総合的判断を原理としてじぶんのなかにふくんでいる。二つの命題を例として挙げるにとどめよう。すなわち「物体界のあらゆる変化において物質の量は不変である」、さらに「運動のいっさいの伝達にあつて作用と反作用はつねにたがいにひとしくなければならない」という命題である。この両者のいずれも必然性を有し、したがつてア・プリアリな起源を有することばかりでなく、どちらの命題も総合的命題であることも明らかである(B17)。

ここまでの記述で明らかなことは、数学的命題はおしなべてア・プリアリな総合判断であること、そして自然科学はア・プリアリな総合判断を原理⁽⁵⁾として含んでいるということ、である。

五 ア・プリアリな総合的原則

だが、これらよりももっと重要な、ア・プリアリな総合的命題が存在する。

ア・プリアリな純粹原則が私たちの認識のうちに現実に存在している…そうした原則は、経験そのものが可能となるために不可欠であること、したがつてア・プリアリであるしだいを私たちは証示しうることだろう(B5)。

ここでカントが「ア・プリアリな純粹原則」と呼んでいるのは、第一批判の超越論的分析論の第二篇「原則的分析論」で示されている諸原則のことである。それぞれの原則を確認しておこう。

直観の公理：すべての直観は外延量である。

知覚の予料：すべての現象において感覚の対象となる実在的なものは、内包量つまり度を有する。

経験の類推：経験はただ、知覚の必然的結合という表象を通じてのみ可能である。

第一類推：現象のいっさいの変移に際して実体は持続し、実体の量は自然において増大も減少もしない。

第二類推：あらゆる変化は、原因と結果を結合する法則に従つて生起する。

第三類推：あらゆる実体は、空間のうちで同時的なものとして知覚されうるかぎり、一貫した交互作用のうちにある。

経験的思惟一般の要請

- 1 経験の形式的条件(直観及び概念に関する)と一致するものは、可能的である。
- 2 経験の質料的条件(感覚)と関連するものは、現実的である。

- 3 現実的なものとのこうした関連が、経験の普遍的条件にしたがって規定されているものは、必然的である。

重要なことは、これらの原則についてカントが「経験そのものが可能となるために不可欠」と言っていることである。だとすれば、これらの原則を精査すれば、カントの言う「経験」がいかなるものであるのか、より詳細に規定できるはずである。

六 「経験」の内実

知覚の予料でカントは次のように述べている。

変化するということは経験のみが教えることのできる現象の或る規定にかかわる…(A171/B213、傍線筆者)

また第一の類推においては次のような文が見出される。

かくして、持続的なもの…が、現象における実体、つまり現象の實在的なものであり、あらゆる変移の基体としてつねに同一のものでありつづけるものなのである(A182/B225、傍線筆者)。

この持続性にもとづいて…変化の概念も訂正される。生成と消滅とは、生成し、あるいは消滅するものの変化ではない。変化とは〔対象が〕現実存在する或る仕方であり、この仕方は、同じ対象が現実存在する別の仕方に続いて生起する(A187/B230、傍線筆者)。

変化が知覚されうるのは、したがって実体においてだけである(A188/B231、傍線筆者)

第二類推では次のように言われている。

時間的に継起するあらゆる現象はすべて変化にすぎず、すなわちそこで持続している実体の規定が継起的に存在し、また存在しなくなることにすぎない。…これが、先の〔第一の類推〕の原則が示すところであった。この原則はまた、つぎのように表現することもできたであろう。

「現象におけるあらゆる変移（継起）は変化にすぎない」。なぜなら、実体の変化というのは、実体の生成は消滅ではないからである(A189/B232f、傍線筆者)。

私たちが現象の継起、したがってまたいっさいの変化を、原因性の法則にしたがわせることによってだけ、経験つまり現象についての経験的認識すらも可能となる。かくてまた現象それ自身も、経験の対象としては、まさにこの法則にしたがうことによってのみ可能なのである

(A189/B234、傍線筆者)。

いっさいの変化は、かくて原因性の連続的なはたらきをつうじてのみ可能であり…これがところで、すべての変化における連続性の法則である (A208f/B254、傍線筆者)。

原則論におけるこれらの記述が意味しているのは、「変化」こそ「経験」の内実に他ならない、ということである。先の引用「変化するということは経験のみが教えることのできる現象の或る規定にかかわる」(A171/B213)は、まさにこのことを意味している。

それゆえ、「ア・プリオリ」の意味を確定することを目的とした本論考における最終的な問いは、次のようになる。「変化とは何か？

七 「変化」「変移」「変身」

「変化とは何か」という問いに答えるために、以下の三つの事例を比較してみよう。

- (1) 水が氷になった。
- (2) 緑が赤になった。
- (3) キリンがライオンになった。

(1)が「変化」である。(2)をカントに倣って「変移」と呼ぼう⁽⁶⁾。(3)に該当する概念は第一批判にはないが、仮に「変身」と呼ぶことにしよう。先の引用でカントは「時間的に継起するあらゆる現象はすべて変化にすぎ」(A189/B232f)ない、と言っていた。それゆえ「現象」においては(2)も(3)も存在しないことになる。(3)がありえないことは言うまでもないとして、(2)もありえないとはどういうことなのであろうか。順番に見ていこう。

(3)が起りうると思えば夢の中であらう。夢ではキリンがライオンになることもありえるし、ツルがカメになることも起りうる。

(1)と(3)の違いは、(1)では実体が持続しているのに対して、(3)においては実体そのものが別のものになってしまうということである。「持続的なもの…が、現象における実体、つまり現象の實在的なものであり、あらゆる変移の基体としてつねに同一のものでありつづける (A182/B225)。」現象においては、実体は持続する。それは基体として同一のものでありつづける。(3)においては実体そのものが持続せず別のものでありつづける。(3)においては実体そのものが持続せず別のものでありつづける。それゆえそれは、現象すなわち客観的な世界において起りうることではないのである。

ではなぜ(2)はありえないのであろうか。(2)がありえない、というのは、(3)がありえないという

のとは趣を異にする。(2)がありえないというのは、「〈単なる緑〉が〈単なる赤〉になるようなことはない」という意味においてである。実際に起こりうるのは、例えば「緑の葉っぱが赤色になる」といった事態である。

「緑」や「赤」は実体ではない。実体の属性である。それゆえ、実体を離れて（あるいは実体とは無関係に）〈単なる緑〉が〈単なる赤〉になるようなことはありえない。「緑」は必ず「なにか（＝実体）」の「緑」でなければならないし、同様に「赤」も「何か」の「赤」でなければならない。

「時間的に継起するあらゆる現象はすべて変化にすぎず、すなわちそこで持続している実体の規定が継起的に存在し、また存在しなくなることにすぎない(A189/B232f)」。したがって、「緑が赤になった」という(2)の事例も、「緑の葉っぱが赤色になった」ということであれば「変化」であり、(1)の事例となる。この場合、緑も赤も葉っぱという実体の規定（＝属性）である。紅葉という「変化」においては、葉っぱという実体は同一のものとして持続しつつ、存在していた〈緑〉という葉っぱの規定が存在しなくなり、変わって〈赤〉という葉っぱの新しい規定が存在するようになるわけである。

八 「変化」とは何か

以上の考察にもとづいて「変化」を規定してみよう。なにごとかの「変化」を認識するためには、何か「変わる」だけでは不十分である。何かが変わるだけでは、「変化」と「変移」は区別されない。「なにかが変わること」が「変化」であるためには、そこに実体が、持続するものとして想定されていなければならない。実体が持続し、そして「変わる何か」がその実体の属性である場合のみ、それは「変化」と呼ばれる。

またその「何か」が「変わる」ためには、原因による連続的な働きかけが必要である。そして「変わりよう」も、キリンがライオンになるというような不連続な変わり方ではなく、連続的である。

九 ア・プリアリな総合的諸原則はいかなる意味において経験を可能にするのか

以上を超越論的観点からとらえ直してみよう。私たちは、現象界において何かが変わったとき、それをおしなべて「変化」としてとらえる。「変化」を認識するからこそ、その「変化」を普遍化することで、自然科学が生まれる。私たちが「変化」を認識することがなければ、自然科学も生じえない。

だが実は、「変化」を認識できるためには、「変化」に先だって実体や因果性といった純粹悟性概念が根源的に獲得⁽⁷⁾されていなければならないのである⁽⁸⁾。もし純粹悟性概念が私たちの認識能力のうちに予めなければ、私たちは現象界のうちに「単なる変移のラプソディー」を認知できただけで、それらを「変化」として認識することは到底できないであろう。「変化」と言うとき、私たちはすでに「実体」や「因果性」といった悟性概念を暗黙の裡に前提しているのである⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾。

私たちは普段、「変化」という言葉を自明のものとして、深く考えることなく用いる。カントは超越論的論理学において、この概念の奥にひそむ超越論的構造を明らかにしたのである。第一批判の「原則の分析論」におけるア・プリオリな総合的諸原則とは、いわば「変化」という語の概念分析の結果なのである。

私たちはすでに、カントの言う「経験」の内実が「変化」であることを確認した。「経験」とは「変化」であり、それゆえ、「変化」の認識を可能にするア・プリオリな総合的諸原則は、「経験」を可能にする諸原則に他ならない。

十 結論 — ア・プリオリとは

いまや私たちはカント哲学における「ア・プリオリ」の意味を十全に規定しかつ理解することができる。「ア・プリオリ」が意味する「経験に先立つ」とは「変化に先立つ」「変化に依存しない」という意味に他ならない。

私たちは第4節と第5節でア・プリオリな総合判断の具体例を見た。最後に、これらの具体例に即して、「ア・プリオリ」の意味を確認しておこう。

数学的命題はすべて、現象界の変化とは関係がない。それゆえそれらの命題は「変化に依存しない」、すなわちア・プリオリな命題である。

自然科学が含むア・プリオリな総合命題（例えば「物体界のあらゆる変化において物質の量は不変である」）は、変化そのものを規定するのではなく、変化に「先んじて」自然のあり方を規定している。それゆえア・プリオリな命題である。

そしてすでに確認したように、「原則の分析論」が示す総合的諸原則は、それらによつてはじめて「変化」を認識できるがゆえに、「変化」に先立っており、ア・プリオリである⁽¹¹⁾。

注

- (1) 『純粹理性批判』からの引用は、慣例に従い第一版をA、第二版をBとし、各引用の最後にその頁数を示す。翻訳については、基本的には熊野純彦訳（『純粹理性批判』、作品社、2012年）を用いたが、必要に応じて適宜変更した。
- (2) 『カント事典』、編集顧問：有福考岳＋坂部恵、編集委員：石川文康＋大橋容一郎＋黒崎政男＋中島義道＋福屋茂＋牧野英二、弘文堂、1997年。
- (3) それゆえ「先天的」という訳語はあまり使われなくなってきており、今日では本論考のように、ラテン語をそのまま「ア・プリオリ」とカタカナ表記するのが一般的となっている。
- (4) 『カント事典』S.123

- (5) 引用文にあるように、カントは「物体界のあらゆる変化において物質の量は不変である」「運動のいっさいの伝達にあって作用と反作用はつねにたがいにひとしくなければならない」(B17)という二つの総合命題を例として挙げている。
- (6) 第6節における引用(A182/B225)を参照のこと。
- (7) 根源的獲得については『〈根源的獲得〉の哲学 — カント批判哲学への新視角』(山根雄一郎、東京大学出版会、2005年)を参考にした。
- (8) 本論文では紙面の都合上、純粋悟性概念のうち実体と因果性(およびそれに該当する諸原則)しか取り上げていないが、他の諸原則や超越論的感性論も「変化」の概念が成り立つために必要なものである。それについての詳細な分析は今後の課題としたい。
- (9) このことから、ヒュームの因果性批判に対するカントの応答も明らかであろう。ヒュームは、経験にもとづいて私たちは因果性の概念を獲得する、と考えた。つまり、何ものかの変化を何度も体験することによって、因果性の概念が得られるわけである。それに対してカントは、因果性の概念(や実体の概念)が予め悟性に備わっていなければ、そもそも変化を体験すること自体不可能である、と反論しているのである。
- (10) 注意しなければならないのは、「変化」ということを言うとき、私たちがすでに「実体」の概念を暗黙裡に前提しているからと言って、その「実体」が何であるのかが必ずしもわかっているわけではない、ということである。「水が氷に変化した」と言う場合、水と氷の実体が H_2O であることがわかっている必要はない。「水→氷」という変移を「変化」としてとらえるためには、水と氷の実体が何であるかが分かっている必要もなく、少なくともこの変移において「実体」の存在が想定されている、ということが必要なのである。
- (11) 総合判断ではないので本文では取り上げなかったが、分析判断もア・プリオリな判断である。分析判断は、例えば「白馬は白い」のように、主語概念を分析することによって得られる判断であるから、当然「変化」に全く依存しない。それゆえア・プリオリであると言われるのである。